

親子のような二人がつながく、田んぼアートの未来

長年続く挑戦 その原動力は『地域を楽しんでももらいたい』という想い

田んぼアート菊川実行委員会の名譽会長・池田正さんと、今年度から実行委員長を務める大石芳倫さん。20歳以上の年齢差がある二人ですが、誕生日は同じ。取材中も冗談を交わし合う姿は、親子のように温かい関係でありながら、まるで長年の親友のようでもありました。

2008年の第1回から、ともに田んぼアートを支え続けてきた二人に、これまでの歩みとこれからの夢を聞きました。

始 まりは一枚の新聞記事でした。農業新聞で「田んぼアート発祥の地」として知られる青森県田舎館村の取り組みを知った池田さんが、「菊川でもやってみよう」と考え、大石さんに声をかけたのがきっかけです。

トマト農家の池田さんは米づくりの経験が少なく、JA遠州夢咲に協力を依頼。一方、プラスチック金型製造会社を経営する大石さんは、仕事で培った技術を生かし、現在まで図柄づくりや座標設計を担当しています。

初めて描いたのは、富士山と飛行機。当時、開港を控えていた富士山静岡空港をイメージした作品でした。

「まさかこんなに長く続くとは思わなかったね」と笑い合う二人の表情から、19年積み重ねてきた時間の長さが伝わってきます。

菊 川の夏を彩る風物詩として定着した田んぼアート。新聞やテレビなどで取り上げられてきたこともあり、市民の皆さんにも広く知られる存在になっています。

「菊川の観光の目玉のような存在になっていくのではないのでしょうか」と誇らしげな表情を浮かべます。

会場には県内外から多くの人が訪れ、田んぼアートをきっかけに菊川の景色や農産物、人の温かさに触れていきます。ただ作品を見るだけでなく、この地域そのものの魅力を知ってもらえることも大きな意義の一つです。

田 んぼアートの見どころは、巨大な絵柄だけではないと二人は語ります。やがらに上れば、一面に広がる田園風景や青空、流れる雲、そして天気良ければ富士山まで望むことができます。

会場では農産物販売やお茶の振る舞いもあり、訪れた人と地域住民との交流も楽しめます。「田んぼだけじゃなく、この地域全体の景色を味わってほしいんです」そんな想いが、毎年多くの来場者を迎えています。

地 域に根づく催しとして続けているのが次の世代や地元とのつながりです。地元の子どもでも、まだ見たことがないという子がいると知り、数年前からは市内全小

校の児童に鑑賞招待券を配布するようになりました。「子どもたちにも楽しんでもらい、次の世代につなげたい」そんな願いが込められています。

学校だけでなく、会場周辺の稲荷部地区の皆さんにも招待券を配っています。「県内外から多くの方が訪れることで、地元の人たちには少なからず負担をかけているかもしれない。それでも、この場所でも今後も続けていくためには、地域との信頼関係が何より大切」と二人は語ります。

華 やかに見える田んぼアートも、その裏側には苦勞の連続です。毎年、天候や稲の生育状況によって色づきや成長の速度が変わり、思い描いた図柄を完成させるには細やかな管理が欠かせません。今年も、これまでポンプでくみ上げていた水を近くの水路から引く方法に変更した影響もあってか、ジャンボタニシが例年以上に発生。稲が食べられてしまえば、せっかくの絵柄が崩れてしまうため、駆除剤を散布するなど対応に追われています。

さらに、田植え機械の維持管理や保管場所の確保、運営資金のやりくりなど、目に見えない苦勞も少なくありません。現在は来場者の鑑賞料や市の「1%地域づくり活動交付金」などを活用しながら運営を続けています。

「大変なことはたくさんあるけれど、それ以上に楽しみにしてくる人がいるから続けられる」と語る二人。毎日田んぼの様子を見に足を運び、小さな変化にも目を配りながら作品づくりに向き合っています。

19 年続けてきた田んぼアートには、数え切れないほどの出会いと思いが刻まれています。特に印象に残っているのが、2019年に菊川市で開催した「全国田んぼアートサミット」です。全国で田んぼアートに取り組む10団体が集まり、それぞれの工夫や苦勞を語り合う貴重な機会となりました。

2020年には、前年に若くして亡くなった市出身の大村勇貴さんの絵本『うーちゃんのみつぎき』を題材に採用。幼い頃から大村さんを知る池田さんにとつて、故人への想いを込めた特別な作品となり、多くのメディアでも取り上げられました。

2021年には、新型コロナウイルス感染症終息への願いを込め、アマビエを描きました。他の地域では開催を見送る団体もある中、感染対策を徹底しながら開催。「田んぼアートを元気づけたい」という想いを大切に、歩みを止めませんでした。

池田さんが一番に残っている話ですが、2024年の紫式部です。来場者が作品の壮大さや美しさに感動し、涙を流す姿を見た瞬間、「やってきてよかった」と心から感じたといいます。田んぼアートは、稲で描く一枚の絵であると同時に、人と人をつなぎ、地域に新たな思い出を生み出す場所でもあります。

今 年、第19回を迎える田んぼアート菊川。実行委員長が池田さんから大石さんへ引き継がれました。実行委員会では高齢化が課題となる一方、近年は30、40代の新しいメンバーも加わり始めました。「世代交代するなら今」、そう考えた池田さんは、大石さんに実行委員長のバトンを託し、自身は名誉会長として活動を支えることになりました。

「肩の荷が下りたよ」と笑いながら話す池田さん。それでも毎日のように田んぼの様子を見に足を運びます。名誉会長になっても変わらない姿に、この活動への深い愛情がにじんでいます。

その隣で大石さんは、新たな挑戦への意欲を語ります。菊川の田んぼアートは毎年図柄を変えていることが大きな特徴で、昨年は全国初となるトリックアートにも挑戦。

毎年絵柄を楽しむに訪れるリピーターも数多くいます。「皆さんに楽しんでもらえる作品をつくりたい」という想いは変わりません。

季 節とともに表情を変える田んぼアート。色の異なる稲が織りなす景色は、訪れる時期によって印象が変わり、何度見ても新たな発見があります。

池田さんは「この場所でもこれからも田んぼアートを続け、多くの人に足を運んでもらいたいです」と話します。大石さんは「今年の図柄であるサクナヒメとヒメカヒメは、風が吹くと表情が変わって見えるような面白さがあります。ぜひ二度、三度と訪れて楽しんでほしいです」と呼びかけます。

親子のような二人がつかないだバトンは、これからも菊川ならではの夏の風景を彩り続けていきます。

実行委員長

大石

よし みち

芳倫さん

名誉会長

池田

ただし

正さん